

奪われたアメ

物事が何度か続く、あるいは続けられると、人はそれを「こうれい」と言う事がある。本来の意味は決まった仕来りしきたりで行われる行事の事を言うのだが……。

「既にこれは、恒例行事よね」

それを言われてしまうと、その恒例行事に参加する事が仕来りのようにされてしまう。アツシユとして、それだけは勘弁して欲しい。

「頼み込む本人にしてみれば好例こうれい行事だったりして」

好例。うまく当てはまる例。適例とも言う。

ケタケタと笑うアナの冗談は、もちろんアツシユにとつて笑える事ではない。

そして頼み込んでいる当の人物、ホプキンス

にとつても笑い事ではない。

「お願いだよお、頼まれてくれよお」

いつも恒例通りの台詞を吐きながら、すがりつく

汗ホプキンスダルマ。何かにつけ見られるこの光景は確かに、恒例行事となりつつあるのかもしれない。

「ええい、放せよ水風船！」

「頼み事を聞き入れるまで何度でも何度もしがみつく脂肪肝を、アツシユは何度も何度も突き放そうとする。この聞き分けのない油豚ホプキンスを説得するのは、さながら恨み強い霊の説得に難儀する交霊者こうれいの儀式にすら見えてくる。」

「これがそれこそ「恒例」なら、どうせ私達も手伝わされるんだし……先に事情を説明してく

れる？バレッタさん」

あぶくホプキンス銭に付き添ってきたレニユエールのバ

レッタに、クロエが説明を求めた。

「……あつちはいいいんですか？」

一応ホプキンスサイフ役を気にするバレッタは、いつも

「……あつちはいいいんですか？」

「……あつちはいいいんですか？」

「……あつちはいいいんですか？」

「……あつちはいいいんですか？」

「……あつちはいいいんですか？」

「……あつちはいいいんですか？」

いて秀でた研究者である事はあまり知られていない。それ以上に高名なコレクターとしての知名度が高い性でもあるが、本人が個人で研究を進めている事も知られていない要因の一つとなっている。

「それだね、パパはフォトンドロップを集めているんだけど……」

そちらの方は、特にハンター達にとって有名な話だ。というのも、彼はハンター達が拾ってくるフォトンドロップを自ら集めたコレクションアイテムと交換している為、綺麗ではあるが使い道のないフォトンドロップをハンター達は嬉々^{きき}とパガニーニ卿の元へ持って来るからである。集めたフォトンドロップがどう使われるかなど、ハンター達にとって興味のない話である為、研究をしている事までは知られていないようだ。

「そのフォトンドロップをパパから貰ったんだ」

もちろん、おね^ホだり坊主^ホもフォトンドロップの価値なぞ、理解しているはずはない。ただ自分の父親が懸命に集めているから欲しいというだけ。「人の物をすぐ欲しがる」のは、それこそ我が儘^ホな子供^ホが取るいつものパターン。
「で、それを無くしたから探して欲しい……って事かよ」

そして貰^アった物^テをすぐ無くすのもまた、いつものパターン。

「ったく、無くすなら倉庫にでもしまっとけて、いつも言ってるんだろ」

「え、だってさあ……」

怒るアツシユに言い訳がましい^ホだつ子^ホ。これも又、いつものパターンである。

「それにしても……今回はちょっとやっかいね」
やっかいなのはいつもの事だが。

唯一^ホ依頼^ホ内容を聞いていなかったアツシユに依頼^ホ者が直接道中を進みながら説明し終えたの

を見計らい、先に依頼内容をバレッタから聞かされていたクロエが言葉を続けた。

「フォトンドロップはそれこそ、アメ玉ほどの大きさがなければ探るのが大変よね」

一行はひとまず、ホブキンス 間抜けが無くしたと自供する場所、ポイント 洞窟の第一階層を歩んでいた。だが、そこで見つかるとはあまり期待していない。

「別に無くしたフォトンドロップそのものでもなくとも構いませんよ。旦那様もいちいちホブキンスに渡したフォトンドロップの色や形を克明に覚えてはいないでしょうからね」

バレッタが言うには、「フォトンドロップを無くした」という事実さえいんべい 隠蔽出来ればいいのだ、との事らしい。要するに、無くした事実が発覚し怒られるのをホブキンス 甘ったれが嫌がるので、それさえ回避出来れば良いという事になる。

アメ玉サイズの結晶を探するのは骨が折れる。しかし同じフォトンドロップならば、新たに見

つけた物でも良い。それがバレッタの考え。そして何も考えていないホブキンス 依頼主は、彼女の提案をそのまま鵜呑みにし、アツシユに頼み込んだという事になる。

確かに、その方が無くしたフォトンドロップを見つかるより楽かもしれない。しかし問題がすぐに解決するわけでもなかった。

「でもねえ……そうそうフォトンドロップなんか新しく見つからないって」

アナが愚痴るように、新しいフォトンドロップを見つかる事も極めて難しい事である。

フォトンドロップがどうやって出来るのか、それは研究を進めているパガニー二卿でもまだ解明出来ない謎である。

フォトンドロップが見つかった例として多いのは、エネミ 怪物達が持っていたというパターン。時折パイオニアやこの地で死んでいったハンター達の遺留品であろうアイテムやメセタ 通貨を、彼ら

怪物達が持ち歩いている事がある。光る物を集める習性を持つカラスのように、この星の生物たちにもそういった習性を持つ物が多い……というのが、一番有力な説とされている。おそらく奴らがフォンドロップを持っているのも、そういった経緯からと考えられる。逆に言えば、どの化け物からもフォンドロップが見つかる事は、本来の発生場所を特定しにくくなる原因にもなっているのだが。

つまりフォンドロップを狙って発掘する事は、極めて難しい。唯一の方法は、とにかく怪物達を倒していくしかない。滅多に見つからないフォンドロップを見つけ出すまで怪物達を狩り続けるのは、骨が折れる以外に何もものでもない重労働だ。

「こんな時に限って、みんなア^{フォンドロップ}メを交換したばかりだなんて……ついてないわ」

別の方法として、パガニー二卿とアイテム交

換する為に誰かが溜め込んでいるフォンドロップを譲り受ける、という方法がある。しかし残念な事に、アナが言う通り全員が何らかのアイテムと交換したばかりだった為、手持ちが一つもなかった。

そもそも、フォンドロップはそれ単体では今のところなんの価値もない。パガニー二卿のように研究をしている者にとってはかけがえのない資料であり素材なのだが、それだけでしかない。宝石のように美しく綺麗な輝きを放つものの、形が歪^{いびつ}で定まりが無い為、お守りとして持つ人はいてもアクセサリとしては不向きだ。

つまり、フォンドロップはそれ相応の目的意識で保有している者以外に価値はなく、市場で取引される品ではないのだ。

「愚痴を言っても始まらないわ。とにかく、見かけた敵^{エネミー}を虱潰^{しひみ}しに当たってみて、あとは

運に任せるしかないわね。無くした場所付近なら、その無くしたドロップを拾った敵エネミーに出くわせるかもしれないし」

クロエが言う事はもつともだが、それで見つかる保証はかなり低い。

「それしかねーのか。つたく、面倒くせえなあおい」

後ろを付いてくる厄介者ホプキンスを睨み付けながら、アツシユが得意の愚痴をこぼす。

「だってえ……仕方ないじゃないかあ。無くしちゃったんだからさあ」

反省という言葉を知らない肥えた家畜ホプキンスには、何を言っても無駄なようだ。

「しっかし……よくもまあ、こんな奴に付き合つてられるよな、あんたも」

ライフルを構えたニューマンに、アツシユは話しかけた。

「あら、これも立派な仕事ですから」

彼女、バレッタは笑顔でそう答えた。

「払いが良いのよ、旦那様バガニ二卿は。ただでくの坊ホプキンスに付き合つてあげるだけで毎回ギルド経由よりも高額な依頼料を貰えるんだから」

始めてアツシユ達がバレッタに出会った時、彼女は自分を「おぼっちゃまホプキンスの世話をするメイド」と紹介したが、それは誤りである。始めてアツシユ達に出会った時のバレッタは、ある目的の為に本当の立場を説明する状況になかった為、アツシユ達を欺く発言をしていたのだ。

彼女は正式なハンターズギルドのメンバーであり、ホプキンスの側にいるのは、依頼者となるパガニ二卿に頼まれ護衛しているにすぎない。その護衛も、足手ホプキンスまといがハンターとしてラグオルに降りる時だけで、四六時中一緒にいるわけではないらしい。

「皆さんご存じのように、アレアレでもテクニクテクニクの能力は高いですからね。そもそも難しい依頼

は請け負いませんから、精神回復材を切らさない限り、そうピンチになる事もございませぬよ」
確かにビヤ樽ホブキンスは装備しているマ、グや鎧天使のハネに装着しているユニットゴッドノマインドで精神力を底上げしている為、本人の資質はさておき強力なテクニクを使う。バレッタが言うように、それだけで大抵の敵エネミーはどにかなる。

実際彼は、各探索エリアの最終地点まで何度か到達している。

だが元々ハンターズフォースとしての腕がない為に、テクニクの使いどころを考えず乱発ばかりする。故にあつさりトと精神力Pを使い切りピンチに陥ってしまうのだ。過去それが原因で愛用……少なくともその時点で使用していた貴重な武器を何度もなくしている。

パガニーニ卿はそんな息子の腕へたれっぶりを知っていたのか、万が一という状況に陥らないよう監視と管理の意味でバレッタを息子ホブキンスの側に置く

ようにしたらしい。

その甲斐もあつてか、バレッタの管理の元、無防備にドラゴンなどに挑戦するような無茶をする事が無くなり、アッシュの世話になる事も少なくなつていたようなのだが……。

「ただ私わたくし、ドジホブキンスでのるまな亀スを立派に育てる教官の任務まで請け負っているわけではございませぬからね」

本人が一向に成長しないのであれば、いつかトラブルは起きるものだ。

「あら？……どうやらおしゃべりはここでお終いのようね」

苦笑いを浮かべながらも、クロエがめざとく敵エネミーの一団を発見した。

「陸エビルシャーク 鮫か。さあ、今度こそドロップ持つててくれよ！」

祈りと気合いを込め両ダブルセイバー 刃を握るアッシュが、先陣を切るように掛けた。

はいつもの光景を休憩中の憩いとして眺めていた。

「さて……どうする？このままこの付近で探し続けるか、それとも釣り場を变えるか……」

クロエが言い出した提案に、三人は悩み始めた。

三時間粘って見つからないならば、場所を変え新たなドロップを求めべきか、それとも落としたドロップをまだこの付近の怪物が持っているという可能性に賭け、もうしばらくこの付近で粘るか。

「もう、別のハンターが拾ったかもよ？だつて無くしてからここに来るまでだつて、それなりに時間経つてたし」

アナは別の狩り場へと場所を移す事が望ましいと提案した。

「いいかげん、この暑苦しいところ飽きたし」
どちらかと言えば、こっちが本音だろう。

「ですが……全く手がかりのない場所よりは、まだこのの方がほんの僅かですが、見つかる可能性は高いんじゃないでしょうか？」

アナの意見に対し、バレッタが異論を唱えた。

「そうなんだけどさあ……」

バレッタが言う事を、アナもよく判っている。判つてはいるが、しかし同じ場所で同じ作業の繰り返しは苦痛以外の何ものでもない。

いつ見つかるか判らない、そんなゴールの見えない作業を繰り返し返すならば、気分を変える為にも場所を変えたい。しかし場所を変えたからといって、結局やる事に変わりはない。

「なあ、考えたつてしょうがねえだろ。とりあえず行こうぜ」

言うよりも早く、アッシュは一人で歩き出していた。

考えても仕方がないと言うよりは、考える事が面倒なアッシュとしては、このどうしようも

ホプキンスはむしろ、固定砲台として有能に働く。動き回ればただの的だが、テクニクの威力が^{レベル}高いだけに、じつとさせたままテクニクだけを乱発させれば援護射撃として素晴らしい活躍を見せる。

「ラフォイエー！ラフォイエー！……はあはあ……ふ、フルイド飲まなきゃ……」

ただ、燃費があまりにも悪いのが欠点だが。

「こういう時、^{スライサー}投刃は便利でいいな」

数多の^{エネミー}敵を一つ一つ追尾し斬りつける刃。

自動^ホテクニク^ブマシン^ンから放たれる^{ラフォイエ}爆炎と共に自分を援護してくれるクロエの^{スライサー}投刃による攻撃を見ながら、アッシュが感心する。

「なら、アッシュ君も^{スライサー}これに乗り換える？私としては、その方が突っ込む君をいちいち制止しないですむから楽なだけだ」

普段あまり嫌みを言わない者から放たれる皮肉は、それこそ^{スライサー}投刃のようにグサリと心に突

き刺さるものだ。

「……」

そしてまた、こういう時の皮肉は的確なだけに返す言葉がない。アッシュはただ黙々と目の前の^{エヒルシャーク}陸 鯨を倒すしか、やる事はなかった。

クロエにしてみれば、アッシュを押さえる抑止力のつもりで皮肉を言ったわけではないのだが、結果としてアッシュが群れに飛び込まないでいてくれるのは助かる。

（まあ、今だけなんだけどね……）

アッシュを囿に群がる^{エヒルシャーク}陸 鯨を^{スライサー}投刃で次々と切り裂きながら、どのように指導してやればこの^{アッシュ}きかん坊が突っ込む癖を改善するのだろうかと思案していた。

「だあ畜生！」

またもや持っていた^{ダブルセイバー}両 刃の柄を地面に叩きつけながら、アッシュは叫んだ。

「こんだけ殺つても出てきやしねえ！」

そもそもフォトンドロップはそう簡単に見つかる物ではない。まして探してすぐに見つかるようでは、希少価値も何もあつた物ではないのだから。

「とりあえず、今日はこれまでにしましょう。」

これ以上は無駄に披露を重ねるだけみたいだしね」

クロエの提案に、皆が頷いた。

約一名を除いて。

「え、だってまだ見つかつて無いよお。今日

パパに見つかつたら、どうするのさあ」

精神回復材トリフルイドをチュウチュウと飲みながら愚痴るアホたれに、切れるなという方が無理な話だろう。

「お前、ふざけるのもいい加減にしろよな！誰の性でこんな熱いところでアメ玉探してると思つてんだよ！」

アツシユは天然不快指数上昇器の胸ぐらを掴むと、ガクガクと強く揺すつた。

「わわ、やめてよアツシユう」

言われて止めるようなら、初めからやりもしないだろうが。

アツシユの激しい揺さぶりで、道化師の帽子が脱げ落ちる。

コツン……

帽子が落ちたにしては、あまりにも不可思議な軽い音が響く。

「あ、これ……」

変な音が気になつたアナは落ちた帽子を拾い上げ、そして何かに気が付いた。

その何かは、帽子の内側に作られていた隠しポケットの中にしまわれていた。

「フォトンドロップ……ねえバレッタ、もしかしてこれって……」

「はい、無くした物と同じ物のようですね」

しばし、沈黙が辺りを支配する。

「あ、そうか。ボク無くさないようにって帽子を細工して、そこに入れてたんだっけ。ああ良かった、無くした訳じゃないんだね」

一人、納得顔でホツとする者。

「じゃ、見つかったし帰ろうよ……なに、みんな怖い顔して……」

一人を除き、怒り顔でキツと睨み付ける者達。

メガネを掛けていながらメガネを探す。そんな古典的なコントも時として笑い話になる。しかしそれは、時と場と、そして人^{ボケ役}による。

もしこの場に、「一応、私の立場もありますから」としばらくしてからアツシユ達の「ツツコミ」を止めに入ったバレットがいなければ、どうなっていた事か。ボケ^{ホッキンス}役はあまり考えたくない事だろう。